

Title	水路部發行の"航海年表"
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1932), 13(141): 10-11
Issue Date	1932-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/162305">http://hdl.handle.net/2433/162305</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 水路部發行の“航海年表”

去9月9日、水路部から寄贈の“昭和8年航海年表”を受理した。水路部の“航海年表”が年々立派なものとなり、又今や廣く航海者にも一般に愛用せられてゐるのは誠に慶賀の至りである。此の“航海年表”は西洋諸國で發行せられる“航海曆”や“天體曆”を少々簡略にし、尙ほ其れに純航海者用の諸表を添加したものであつて、其の内容から見ると、實に航海者のみならず、天文同好者にも甚だ便利なものであるから、少しく下に紹介する。

“航海年表”は下の如き諸表から成つてゐる。

太陽 2—37 次の二種類の表がある。

- (1) 毎日グリニチ正午の時の：時差、赤緯、視半徑、平均太陽の赤經
- (2) 毎日2時間毎の：E. と赤緯 (但し E. = 時差 + 12<sup>h</sup>)

太陰 38—97 次の二種類の表がある。又餘白に盈虛や遠地近地の時間がある。

- (1) 毎日グリニチ正午の時の：赤經、赤緯、視半徑、地平視差、月齡、グリニチ南中時。
- (2) 毎日2時間毎の：E<sub>C</sub>、赤緯、視半徑

(但し E<sub>C</sub> = (平均太陽の赤經) — 12<sup>h</sup> — (太陰の赤經))

惑星 98—121 金星、火星、木星、土星について、次の二種類の表がある。

- (1) 毎日グリニチ正午の時の：E<sub>P</sub>、赤緯、グリニチ南中時。(但し E<sub>P</sub> = (平均太陽の赤經) — 12<sup>h</sup> — (遊星の赤經))
- (2) 十日毎の：赤經、等級(光度)、視半徑、地平視差。

比例部分表 122—127

恒星時算出表R. 128—145, 毎月毎日2時間毎の恒星時と、比例部分表

常用恒星 146—147. 全天21個の一等星と、北極星と、Castor と Denebola (β Leo) と、總計24星の、赤經と赤緯とを20日毎に、星は固有名のABC順である。

恒星索引 148—150. 總計156個の恒星を赤經順に配列し、等級、赤經、赤緯、2ヶ月毎にグリニチ南中時、20日毎の位置を記載してゐる頁數。

恒 星 151—161. 上記の156星中、常用星24個を除いた132星の赤經と赤緯を20日毎に。

北極星緯度表 162—165. 第1表、第2表、第3表

北極星方位角表 166.

日食及月食 167.

天體出沒方位角表 168—169. 緯度 0°—65°, 赤緯 1°—30°

天文薄明時間表 170—171. 南北緯度  $0^{\circ}$ — $70^{\circ}$ , 半月毎に

天體出沒時角表 172—173. 緯度  $0^{\circ}$ — $70^{\circ}$ , 赤緯  $0^{\circ}$ — $30^{\circ}$

日出沒表(標準時)174—209. 日本近海の54港につき, 毎月2日毎

日出沒表(地方平時)210—218. 北緯  $0^{\circ}$ — $60^{\circ}$ , 毎月10日毎

南緯に對する日出沒改正表. 219—220

主要港經緯度表 221—222.

月出沒時(凡例) 223. 説明及び圖一枚.

月出沒時(地方平時). 224—235. 經度は $60^{\circ}$ 毎, 毎月8日毎の「赤道」に於ける出沒時  
と「基数」

解 説 236—252.

天文略説 236—239.

航海年表 240—252.

## “Wren”の奇縁

第十七世紀の英國に、ニウトンやハレイやフラムスティード等の友人として Sir Christopher Wren といふ人があつた。彼は大火後のロンドン市復興期に、セント・ポールを始め、夥しい建築設計をした建築學史上の偉傑であるが、博學多趣味で、1661年にオクスフォード大學の天文學教授となり(「天界」第131號第106頁)、又、1675年には英國の誇りグリニチ天文臺を建築設計した。彼は1632年十月20日に生れ、1723年二月25日に死んだので、去1932年十月20日にはロンドン市セント・ポール寺で盛んな生誕300年紀念式が舉げられ、グリニチ天文臺長ダイソン博士も之に列席した。

ところが、茲に不思議なことがある。去る12月8日の午後、一羽の可愛らしい小鳥が京都の花山天文臺本館へまぎれ込み、出口を見失つて廊下を飛びまはつてゐた。山本、稻葉、豐田三氏は、研究の手を止めて、慰み半分に簪や風呂敷など廣げて此の小鳥を追ひかけまはり、遂に首尾よく之を捕へた。そして籠に入れて大切に飼つて置いたのに、飼ひ手の不慣れのためか、翌朝あはれにも小鳥は死んだ。そこで葬らうとしたが、餘りに美しく可愛い鳥なので、大學の動物學教室へ電話で精しく事情を語り、教へを乞ふところが、川村多實二教授から、『其れはみそざえです。英語で WREN です』と教へられた。花山へ Wren が飛んで來た!! しかも此の300年祭の營まれてゐる1932年の秋の夕に! 此の鳥は、川村教授の求めにより、動物學教室へ寄贈された。